

第17回 日本医療保育学会

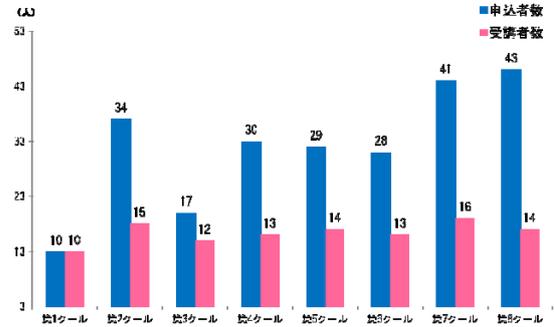
ホスピタル・プレイ・スペシャリストがおこなう
プレイ・プレパレーションの一例、ミニワークショップ

静岡県立大学短期大学部 准教授 HPS
日本医療保育学会 理事
松平 千佳

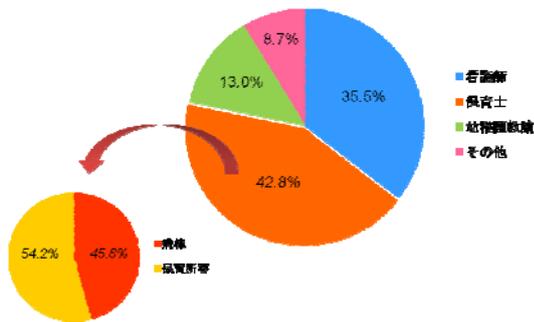
東京都立小児総合医療センター HPS 保育士
杉渕 早苗

平成25年6月1日 於 愛知県産業労働センターウインクあいち

HPS養成講座 申込者・受講者の推移



HPS養成講座 受講者の保有資格 (複数回答)



病棟保育士がHPSを志望した理由

- 医療現場における**保育士の立場の微力さを多々経験した**。
- HPSになることで、**医療者として同じ目線に立てる**。
- 勉強不足の自分では、医師・看護師に自信を持って意見を言えない。子ども側に立って、**はっきりと意見を言うため**にもHPS講座を受講したい。
- 病院環境や子どもの入院生活について**他職種に訴えていく**上でも、HPSの専門的知識と資格が必要であると感じている。
- 「遊び」を通して子どもたちと関わっていくことで、入院する子どもたちを支援する**医療チームの一員になりたい**。
- **医療スタッフの一員として踏み込んだ保育をしたい**という思いがあった。医療保育士という専門性を身に付けたいと思った。

- 患児との関わりの中で、**保育士の知識だけでは不十分で限界がある**ように感じた。
- 専門的な教育と訓練を受け、**保育士が自信と誇りを持って**仕事をするようになれば、**医療スタッフとの連携**を今まで以上に深めることができる。
- 「遊び」そのものにしか目がいかず、患児をいろいろな面から見るができなかったが、**検査・治療と向き合う怖さ、不安が精神的に大きくのしかかっていることが患児より伝わり、プレパレーションの必要性を痛感**するようになった。
- 子どもに**予想外の不安の表出があった際、対応が十分に**できず、**自分の知識不足、力不足を感じていた**ので、機会があればプレパレーションについてしっかりと学びたいと思っていた。
- 今まで医療保育の現場で実践してきたことを**理論的に実証し、今後の実践により高い技術や知識が導入**したい。

- 病院で遊びを提供することの意味や目的を再確認し、病院で遊びを通して子どもを支援する者としての姿勢や方法を見つめ直したい。
- 入院している子どもと触れ合ってみると、思ったよりもずっと**援助が必要であることがわかった**。それと同時に**保育園と病院の違いや、自分の勉強不足**を感じた。
- 子どもは**どんなに病気が重くても遊びたい**と思っていること、また**遊びは治療の一環**であり、病気の回復を早めたり、治療でのトラウマを癒したりする効果があると感じた。
- HPSのことを知り、**病気の子もだけでなく、家族を支えていく**ということでも、とても重要な役割であると感じた。
- **医療の現場では病気の治療はされても、その子ども自身の発達の保障はされていない**と感じた。

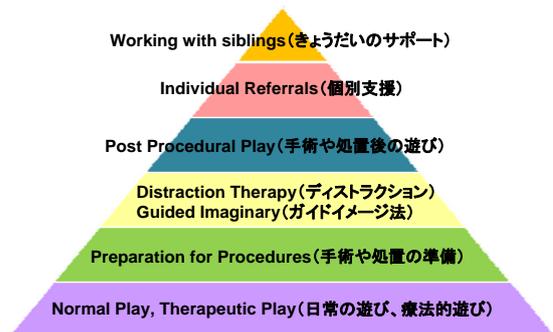
看護師がHPSを志望した理由

- 看護師は毎日の業務の繁忙さを理由に、子どもの成長発達に不可欠な遊びの援助が保育士に任せきりになっている。
- 子どもの心の準備ができるまで待てず、「時間がない」「待てない」と押さえつけて治療を行っているのが現状。
- 治療中心でも、その間に少しでも楽しいと思える時間を工夫してあげられたら、と考えながら仕事をしていた。
- 遊びについて勉強すれば、子どもたちの一日に変化をもたらすことができ、治療と一緒に考えられたらもっと良い効果が出るのではないかと感じた。
- HPSの先輩の話を知ったり、活動を見ていると、これからの施設での重要な役割であると感じ、自分の気持ちやスキルだけではまだまだ足元にも及ばないと痛感した。

- プレパレーションやディストラクションを少しずつ取り入れてはいるが、他施設のものを参考にしたりと手探り状態のため、専門的に学びたい。
- 検査や治療について、どの程度理解・納得しているか確認もできず、短い検査は泣いていても押さえつけ、長い検査は鎮静をして行っているが、プレパレーションをやれば泣かずに検査できるのではないかと思った。
- プレパレーションに関して、雑誌等から取り組み報告などを参考に行ってきたが、少ない情報と知識の無さにより、病棟内で定着しなかった。
- 遊びについて学ぼうと保育関係の本を読んでも、病気の子どもたちを中心に書かれたものがなく、一般的な本を参考にするしかなかった。
- 患児の成長・発達に合わせたプレパレーション、患児の成長・発達を促す援助の知識、技術を習得したい。

- 子どもたちが気持ちを素直に表現できるような環境作りのため、医師、看護師、保育士それぞれが技術を共有しあい、専門的な役割・力を発揮できるような環境作りが必要とされていると考え、看護師ではなく、HPSの立場から携わりたいと考えるようになった。
- 治療が優先され、家族の面会が制限されている状況に対し、専門的な知識をもって他の医療職と関わり、子どもと家族にとって良い環境作りができると考えた。
- 治療行為や日常的に決められた生活援助を行うことが主となっており、日々の業務の中で遊びを取り入れた看護ができていないため、遊びを通して患児やその家族を理解し、支援していく方法を学び、病棟全体で遊びを取り入れた患児の生活支援について知識を深めていきたい。
- 子どもの立場に立った環境作りや遊び・ケアが提供できるよう、組織内での子どもの援助に対するスタッフの啓蒙活動や意識改革、技術の統一について説得力を持って進めていくことができる。

HPSの専門技術



プレパレーションとデストラクションは切っても切れない関係にあるが、あの噂は本当なのか？

お母さんや保育士は処置を頑張った子どもたちを抱きしめて、「頑張ったね」と褒める人だから、怖い思いをする処置室に同席しない方がいい。

同席すると、親や保育士までもが自分に痛い思いをさせると誤解するので、処置室などには入らない方がいい。

間違いだと考える理由

同席しても「頑張った」と言える。むしろ、デストラクションなどの役割を担ってもらい、対処方法を実践してもらおうことができるのでは？

同席したからと言って、痛いことをする人という誤解は生まれないのでは？

子どもは、恐怖を感じる時に誰に側にいてほしいと思うのか、それは親ではないだろうか？

親の権威を傷つける可能性がある。

ファミリーセンタードケアの理念に反する。

2009年10月10日 第34回静岡県小児保健学会
 子どもの採血によるストレスの軽減と
 心的外傷の防止に関する研究
 静岡県立総合病院 小児科長 原崎正士他

研究目的・対象・方法

- ・【目的】保護者の処置同席やHPSによるディストラクションが子どもや保護者の処置に伴う精神的苦痛を軽減できるか調査・検討する。
- ・【対象】当院小児科に入院し採血処置を受けた1歳9ヶ月から8歳4ヶ月までの子どもとその母親
- ・【方法】採血は医師、看護師のみのチーム(方法A)と、母親に同席してもらい、医師、看護師、HPSのチーム(方法B)との2種類の方法で行った。一部の対象者については1回目をA、2回目をBで行うこととした。それぞれの処置終了後、母親にアンケート調査を行い比較検討した。

結果のまとめ

- ・ A群(非介入群)17名、B群(介入群)16名からそれぞれアンケートを回収した。
- ・ B群においても処置中に約半数の子どもたちが泣いていたが、多くの子どもたちがディストラクションに興味を持ち、遊びに参加していた。
- ・ 処置終了後の子どもの様子について、A群では約8割が普段とは異なる様子であったが、B群においては約6割が普段どおりの様子であった。
- ・ 母子分離させた状況下での処置は母親も不安を感じることが多く、ほぼ全ての母親が採血処置に同席することを必要と感じていた。

この研究を通して分かったこと

- ・ 採血に保護者が同席して子どもを励まし、HPSが遊びを通して子どもの気をそらすことにより、子どもや保護者にもたらず精神的苦痛を軽減できることが示唆された。
- ・ さらにHPSが小児医療チームの一員として働くことにより、小児医療チームとしての協働意識が強化され、子どもの情緒に寄り添った医療の提供、遊びを積極的に取り入れた療養環境の整備が促進されると思われた。

提案

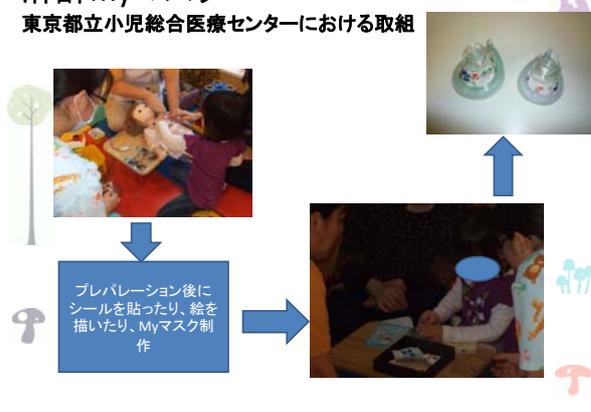
われわれは、病気の子どもにとって最も良いこと、病気の子どもが必要とすることを実践するべきなのではないか

遊びとプレイ・プレパレーション

- ・遊びは、こどもが成長・発達する上で、欠かせない
- ・こどもにとって遊びは生活そのものであり、生活は遊びそのものである
- ・遊びは、こどもがもっとも得意とするもので、コミュニケーション手段である

麻酔myマスク

東京都立小児総合医療センターにおける取組



スタンプラリー



医療なぞなぞカード作りに挑戦してみよう

- なぞなぞカードを作成する側に対する効果
 - ・ なぞなぞは遊びなので、プレイ・プレパレーションとは何かを理解するための簡単な方法
 - ・ とかく、難しくなりやすい医療器具の説明を楽しく親しみもてるものにするために考えることによって、遊びと医療を融合させる援助の視点が学べる。
- なぞなぞに挑戦する側に対する効果
 - ・ 言葉を使った遊びなので、楽しい。
 - ・ 怖い医療器具などに親しみを持てる。
 - ・ なぞなぞというユーモアを持った人が病院にいることが伝わる。

環境を使ったプレイ・プレパレーションの一例 静岡県立こども病院HPS諏訪部さんの取り組み

